

東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター

平成22年度事業報告

目 次

1. センター概要	2
2. 教員	3
3. 委員会等	3
4. プロジェクト事業	5
1) 公募プロジェクト	5
2) センター機関推進プロジェクト	7
○重点プロジェクト	8
○一般プロジェクト	16
5. アジア・アフリカ学術基盤形成事業	17
6. 国内・国際連携事業	19
7. 研究成果の公開・発信事業	19
8. 研修事業	20
9. その他	22

東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター

1. センター概要

東洋学研究情報センター（Research and Information Center for Asian Studies、以下、センターと略）は、東洋学文献センター（昭和41年設置）に代わる東洋文化研究所の附属施設として、平成11年4月1日に新設された。センターは、研究所が行うアジアに関する先端的な研究と連動し、またその成果を踏まえながら、アジア全域を対象とする「アジア資料学」の確立を目指している。具体的には、「アジア地域の人文・社会科学（文献・造形資料、現代的諸課題）に関する資料・情報の収集・研究とその情報化」に関する事業を担っている。

センターの研究分野は、造形資料学分野、比較文献資料学分野及び平成21年度から増設されたアジア社会・情報分野の3つに分かれる。

造形資料学分野は、美術作品・建築・考古資料・民族学資料・地図・挿絵・映像・写真等の非文字資料を、比較文献資料学分野は、アジア諸言語で書かれた書籍、新聞雑誌、文書、碑文等の文字資料を、アジア社会・情報分野は、アジア・バロメーターなどのデジタル化された社会調査資料を主な研究対象とする。センターの教員スタッフは、造形資料学分野担当の教授1・准教授1、比較文献資料学分野担当の教授1・准教授2、アジア社会・情報分野担当の教授1・准教授2・助教1からなる。

平成15年度から、新たに外部資金を戦略的に投入することによって事業の拡大・充実を行い、さらに、文部科学省科研費などにより実施された一般プロジェクトとも連動して、包括的な内容を持つアジア資料学の構築を目指した事業を実施するようになった。（個別のプロジェクトについては別表参照）。現在では、これらは機関推進プロジェクトとして継続的に実施されている。

平成21年6月には、文部科学大臣によって共同利用・共同研究拠点に認定され、翌平成22年度から全国の関連研究者コミュニティに対しより開かれたセンターとしての活動を開始した。共同研究は上記の3分野にまたがって公募され、学内外の委員からなる運営委員会での審議によって選抜・評価されている。

文献資料とデータベースはこれまでも広く国内外の研究者・学生に公開し利用されてきたが、それ以外の研究資源も含めた使いやすい公開方法の整備、より高次元なアジア研究データベース開発を通じ、研究者コミュニティや社会の要望に応え、新しい共同研究に発展しうるような共同利用の実現を目指している。

平成21年度には、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業に「アジア比較社会研究のフロンティア」が採択され、アジア社会・情報分野を中心に3年計画で、拠点化のための作業が進められている。

2. 教員

センター長	教授	羽田 正
副センター長	教授	園田 茂人
	教授	丘山 新
	教授	榊屋 友子
	准教授	板倉 聖哲
	准教授	名和 克郎
	准教授	廣田 輝直
	准教授	松田 康博
	准教授	スミス ロジャー・デール
	助教	松田 訓典

3. 委員会等

1) センター運営委員会

開催日 平成22年6月18日(金) 15:00～

平成23年2月16日(水) 13:00～

運営委員会委員

園田 茂人	東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター アジア社会・情報分野・教授
名和 克郎	東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター 比較文献資料学分野・准教授 ※1
大木 康	東京大学東洋文化研究所東アジア部門・教授
小松 久男	東京大学大学院人文社会系研究科・教授
村田 雄二郎	東京大学大学院総合文化研究科・教授
加藤 博	一橋大学大学院経済学研究科・教授
小長谷 有紀	人間文化研究機構・国立民族学博物館民族社会研究部・教授
水野 直樹	京都大学人文科学研究所人文学研究部・教授
宮治 昭	龍谷大学文学部・教授
宮 篤博史	成均館大学東アジア学術院(韓国・ソウル)・教授
柳 澤 悠	東京大学名誉教授

※1 丘山 新委員と交代

2) センター委員会

開催日 平成22年 4月 6日(火) (臨時) 13:00～
平成22年 4月13日(火) 14:30～
平成22年 5月18日(火) 14:30～
平成22年 6月 8日(火) 14:30～
平成22年 7月 6日(火) 14:30～
平成22年 9月14日(火) 14:30～
平成22年10月 5日(火) 14:30～
平成22年11月 9日(火) 14:30～
平成22年12月 7日(火) 14:30～
平成23年 1月11日(火) 14:30～
平成23年 2月 8日(火) 14:30～
平成23年 3月 1日(火) 14:30～

センター委員会委員

丘 山 新	センター比較文献資料学分野、 委員長 (8月31日まで)
松 田 康 博	汎アジア研究部門
名 和 克 郎	汎アジア研究部門
小 寺 敦	東アジア研究部門 (第一)
板 倉 聖 哲	東アジア研究部門 (第二)
榊 屋 友 子	西アジア研究部門
廣 田 輝 直	センター比較文献資料学分野
園 田 茂 人	アジア社会・情報分野、 委員長 (9月1日から)
松 田 訓 典	アジア社会・情報分野

4. プロジェクト事業

1) 公募プロジェクト

センターに蓄積されてきたアジアのデータベースを含む諸資料、人的ネットワーク、施設を活用し、アジア各地に関する多様な情報を、時間軸、空間軸に沿って比較・俯瞰し、アジアと世界の新しい理解方法を提案するための共同研究を募集し、実施している。

1. 課題名：アジアの工芸の〈現在〉 工芸の人類学の基礎研究

研究者

神戸大学大学院国際文化科学研究科・教授 窪田幸子（申請者）

岡山大学文学部・教授 中谷文美

南山大学人文学部・准教授 濱田琢司

東洋文化研究所汎アジア部門・教授 松井健

研究期間：（2年計画1年目）

◆全体計画

アジアの工芸については、漢籍の研究の一環として伝統工芸の現場がフィールドワークされたこともあったが、今日では学術的に研究されることが比較的少なく、特に人類学においてはそうである。本研究は、アジアにおいて工芸の人類学を構想するための基礎研究を行おうとするものである。まず、本研究では、實際上工芸の技術や歴史においてつながりのあるアジアの島嶼部からオセアニアまでを含めたアジアの工芸の人類学を構成する具体的な研究分野の総覧をつくることを課題とする。これは、個別の地域における研究のあり方を参考にした地域個別性を踏まえていなくてはならないが、同時にアジア諸地域間の比較対象に耐える枠組みであることが必要である。こうした個別性と地域性(個別性)を踏まえた枠組みをもった工芸の人類学を構想することは、変転の激しいアジアにおける工芸のあり方、ほかでもない、その背後にある生活文化の変化のあり方を記述、分析する方途を開発することになるのである。さらに、今日のグローバル化のもたらす大きな変化、アジア全域における人口の流動化、観光化とその影響などの外因をもよく検討するものでなくてはならない。こうした外部的な社会的・経済的文脈の変化は、工芸にとっても、また工芸の生産、流通、消費に関わる社会にとっても、枢要な意味をもつことは言うまでもないからである。

2. 課題名：国際的な米価高騰とインドシナ半島の稲作の変容に関する農業経済史

研究者

東京外国語大学大学院総合国際学研究院・准教授 宮田敏之（申請者）

敬愛大学国際学部・教授 高田洋子

東京大学東洋文化研究所南アジア部門・教授 高橋昭雄

研究期間：（2年計画1年目）

◆全体計画

2008年、世界的に米価が急騰し、国際米市場は大きく混乱した。その背景としては、原油価格の上昇、地球温暖化による気候変動、バイオエネルギー用穀物栽培の拡大による食用穀物の不足など、長期的な要因があった。しかし、直接的には、主要米輸出国であるインドやベトナムが、天候不順やコメの国内流通の問題等により、米の輸出を規制し、これが、混乱の引き金となった。他方、フィリピンやエジプトなどの米輸入国では、輸入米不足への不安が広がって、米価が上昇し、社会不安も増大した。国際米市場が、極めて不安定な均衡の上に成り立っていたことが、明らかとなった。本研究は、こうした不安定な国際米市場の中で、世界有数の稲作地域であり、かつ、主要米輸出地域でもあるインドシナ半島において、どのような変化が起きているのか?について、農業経済史の立場から分析する。特に、米輸出価格が急騰した、米輸出世界第一位のタイ、90年代に急速に生産が回復して米輸出が復活したが、米輸出規制に踏み切らざるをえなかったベトナム、サイクロンによる被害から回復を目指すミャンマーを研究対象とする。第二次世界大戦後、これら三カ国の稲作と米輸出の歴史は、大きく異なる。しかし、インドシナ三大デルタの稲作地帯は、今後も、主要な米輸出地域として、国際米市場の中長期的な安定に重要な役割を果たすことが期待される。そこで、本研究は、第二次世界大戦後から2000年代に至る、およそ半世紀にわたるタイ、ベトナム、ミャンマーの稲作、米価格、米輸出経済の歴史的变化を踏まえ、現状と今後の課題を比較検証する。

2) センター機関推進プロジェクト

研究情報の収集，資料整理やデータベースの構築とその公開に関わるプロジェクトを募集し，実施している。

重点プロジェクト……センター予算によって重点的に実施するもの。

一般プロジェクト……センター予算外から予算措置を講じて実施するもの。

平成 22 年度センター機関推進プロジェクト一覧

	No.	分野	申請者	プロジェクト名	継続期間
重点	1	文献	丘山	漢籍知識庫の構築と国際共同運用への試み	新規(3-1)
	2	文献	鈴木	アラビア文字圏ポリグロット・グロッサリー・プロジェクト	新規(2-1)
	3	文献	松田(康)	台湾現代史貴重史料の収集・整理	新規(3-1)
	4	文献	廣田	古典一次資料上における知識DB構築支援の試み	新規(2-1)
	5	文献	名和	日ネ協会旧蔵資料データベース構築	新規(3-1)
	6	造形	小川	アジア美術画像アーカイブ(第2期)	継続(3-3)
	7	造形	板倉	東アジア絵画デジタル・アーカイブ・プロジェクト	新規(3-1)
	8	造形	平勢	東文研蔵貴重物品の整理とデジタル化	新規
	9	社会情報	園田	日本とアジアを繋ぐ:アジア駐在経験をもつ日本人ビジネスマンのライフストーリー	新規
	10	文献、造形、社会情報	安富	社会生態史学のためのデータベース構築	新規(3-1)
一般	11	造形	柁屋	イスラーム美術・建築作品の画像・情報アーカイブ	継続(5-2)

重点プロジェクト

1. 漢籍知識庫の構築と国際共同運用への試み（3年計画1年目）／丘山

[文献]

◆全体計画

センターでは、その設立とともに国内外に先駆けて『漢籍目録データベース』を構築し、引き続き『貴重漢籍全文画像データベース』の構築を開始した。本プロジェクトは、1) これらのデータベースそれぞれの質と量との両面において更に充実を進めつつ、新規に特別貴重書の全文カラーデジタル化を開始し、2) レファレンスとしての目録データベースとファクトデータベースとしての貴重書データベースという二つの「資料庫」に、新たな要素（第一段階としては四庫全書総目提要）を媒介として用い、これまでの「資料庫」とは次元を異にする「知識庫」の構築をめざす。3) さらに、上記『目録データベース』は既に『全国漢籍目録データベース』の基となり、また台湾地区の『漢籍目録』との共同運用へと展開してきたが、昨年度より『貴重漢籍データベース』に関して、中国国家図書館との協定に基づき共同研究を開始し、国際共同利用活動の一環として、漢籍に関する国際共同運用を推進する。

◆今年度の進捗状況

上記の全体計画に沿って：

1) 貴重漢籍とはされないものの使用頻度の高い漢籍は痛み方が進みやすい。それら保護するために、本年度はまず、稀覯本である『佛果碧巖破関撃節（いわゆる碧巖録の最古の資料である一夜本）』をグレースケール、および白黒でTIFFとPDFとでデジタル化した。来年度予算が付けば、これらを貴重漢籍データベースに追加入力することになる。

2) 本研究所の漢籍目録DBは、漢籍独特の分類を階層的に調べることもできるよう学習用にも配慮した設計になっている。22年度からさらに「四庫全書総目提要」を付加する作業を開始したが、今年度は子集部の提要をテキスト化した。

3) 21年度に協定を締結した中国国家図書館と漢籍に関する共同研究の具体的な作業として、中国国家図書館に一部貴重資料を除き、資料提供し、国家図書館のHPからも直接に閲覧できるようにしたため、中国国内からの閲覧速度も飛躍的に向上した。

◆具体的な成果物

貴重漢籍善本全文画像データベース <http://shanben.ioc.u-tokyo.ac.jp/>にて、2006年4月より遡及入力をしつつ公開中。

『佛果碧巖破関撃節』（23年度上半期に公開予定）

2. アラビア文字圏ポリグロット・グロサリー・プロジェクト（2年計画1年目）／鈴木

[文献]

◆全体計画

アジアについては、文字圏として文化圏を捉えれば、漢字圏・梵字圏・アラビア文字圏の3文字圏がその中心的部分を構成していると捉えうる。文字の共有は文明語・文化語の共有より生じ、文明語・文化語の共有は語彙の共有をもたらし、思想・認識に一定の共通枠組みを与える。このような観点から、本プロジェクトは、アジア3大文字圏中、まずと

りあえずアラビア文字圏を取り上げ、アラビア文字圏における最も基本的な言語として、アラビア文字圏全体の文明語・文化語たるアラビア語、その北半における共通文明語・文化語として共有されるペルシア語、そしてイスラム世界最後の世界帝國的な存在であったオスマン帝国の最重要言語であったオスマン語の3言語について、アラビア文字配列によるポリグロット・グロッサリーを作成することを計画し、その基礎作業として、上記3言語につき、各言語の語彙のアラビア文字入力作業を推進してきた。

◆今年度の進捗状況

5年にわたったプロジェクトにおいて、アラビア語・ペルシア語・オスマン語及びそれに関連してアルファベット表示のトルコ語につき、語彙のコンピューター入力作業を終え、その最終チェックも第一段階を終えることを得た。さらに、この3言語をアラビア文字配列するための予備的検討も実施した。

積義については、各言語について各々の言語についての最も古典的な辞書のテキストを、原典性を重んずるべく、原辞書のCD-ROM版を作成し、各語彙についての積義部分をカット・アンド・ペーストの手法によって、アラビア文字配列することを計画しており、その素材となる原辞典の一部も入手し、CD-ROM化した。

さらに技法開発のために検討を進めた。ただ、積義部分の全面的配列にむけ、重点プロジェクトの形で完成を目指す。

◆具体的な成果物

なし

3. 台湾現代史貴重史料の収集・整理 (3年計画1年目) / 松田

[文献]

◆全体計画

申請者は、これまで長年にわたり台湾現代史貴重史料を私費で収集してきた。東文研に移ってからは個人研究費などを使って収集を継続した。これらの史料の多くは台湾の図書館を含めて、どこにも公開されていない貴重なものである(流出した政府の機密文書を含む)。ただし、従来は個人的努力に依存しており、高価だったため、貴重資料の収集のチャンスを逃したこともあった。こうした貴重資料の収集をプロジェクトとして予算化し、より系統的・機動的な収集と整理を行うこととしたのが本プロジェクトの趣旨である。

◆今年度の進捗状況

平成23年3月現在、所定の予算と部門基盤構築費を併せ、古書と档案を合わせて70件の収集が済んでいる。今年度は、申請者が年度の後半米国に長期出張したため、資料の整理ができず、全額資料購入に充てた。来年度プロジェクトが認められれば、長期出張から帰国した後に整理を始めたいと考えている。

◆具体的な成果物

整理が一段落すれば、所定の手続きを踏んだ上で、順次東文研図書室で公開したいと考えている。このため、平成23年度の実施計画としては、科研費や個人研究費による

台湾への出張の機会を利用して積極的に資料収集を進める。2年目としては、史料収集経費として700,000円、整理(書誌情報の入力等)のためのアルバイト代として100,000円を計上している。

4. 古典一次資料上における知識DB構築支援の試み(2年計画1年目) / 廣田 [文献]

◆全体計画

当センターがこれまでに蓄積してきた古典一次資料のさらなる活用のためには、将来的にスキャン画像の電子テキスト化作業を経て、そこに研究者による翻訳、研究論文等による知識を抽出し関連づけてゆく必要がある。本プロジェクトでは、翻訳テキストに含まれる意味情報を原文テキストと密に関連づけることによって、原語の持つ意味の広がり进行分析したり、原語->翻訳語->原語とたどることによって関連概念を探し出すモデルシステムを作成する。得られた知見をもとにテキストから特定概念に言及している部分を検索したり、テキスト群から辞書を作成する支援システムとして応用をめざし、同時に、古典学者の丹念な読みの成果を、二次利用可能な形で蓄積してゆくにはどのようなシステムが必要かを明らかにする。

◆今年度の進捗状況

当初計画の1)の電子テキストの準備については、完全に自由に使えるデータとして著作権の切れた1885年のfausbøl版PTSテキスト等についてOCR作業、エラー箇所の訂正作業を行い、n-gram検索できるようデータベース化した。また種々の制限付きながらも公開電子テキストとして入手できる、タイ第5、第6結集版、スリランカ版(GNULICENSE)、ビルマ第6結集版(world tipitaka)を原文テキストとして、K.R.Norman(著作権あり)、中村元(著作権あり)、正田訳(公開)を翻訳テキストとして準備した。この作業の副産物としてromanized pali用のOCR環境が得られた。

当初計画の2)の原文-翻訳対照データの抽出については、まず、パーリ語のstemming(活用語から辞書語への変換)辞書の作成を独自に行うことにした。オープンソースプロジェクトのDigital Pali Readerのように、語形変化、連声のルールから機械的にstemming候補を生成することも行われているが、この方法では多数の意味的にありえない候補が得られてしまう。機械的な解釈には当然限界があるから、翻訳文との対照から得られた実際に解釈可能なstemmingのみを辞書形式で蓄積していく方が知識の蓄積の上で適当と考えた。PTSのPali-English Dictionaryの見出し語と活用形に一致しない単語について、手作業でstemming辞書に追加することにした。この作業は継続中である。また、原文と翻訳とを対照づけるためには、異本や版の違いになるべく影響されずに、文章中の単語位置を一意に決定する参照手法が必要であるが、XML系の既存規格では難しいため、単語境界へのアンカータグの埋め込みとにより行うこととした。

当初計画の3)については、stemming辞書の作成が完了し次第実現する予定である。

◆具体的な成果物

原文・翻訳・スキャン画像表示デモ(23年5月ごろ予定)

<http://pali.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

また、本システムの応用として、倉石ノートアーカイブ（23年度内順次公開）

<http://kuraishi.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

(派生物)

fausbøl 版 PTS テキスト

romanized pali 用の OCR 学習データ

各翻訳に対応する stemming 辞書

Pali-English Dictionary 見出し語データ

5. 日ネ協会旧蔵資料データベース構築（3年計画1年目）／名和

[文献]

◆全体計画

昨年本研究所に寄贈された社団法人日本ネパール協会旧蔵資料は、1950年代から60年代主にネパール国内で出版された、ネパール語及び英語の多様な書籍・パンフレット等1500点以上からなる、世界的に見ても貴重なコレクションである。本プロジェクトは、同資料についてのデータベースを作成することをその目的としている。その際、これまで研究者間でもほとんど知られていなかった同資料の内容を広く紹介し利用に供するために、単なる書誌情報のみならず、内容紹介等の情報等を加えた **annotated bibliography** としたい。

◆今年度の進捗状況

計画の初年度にあたる今年度は、アルバイトを雇用しネパール語及び英語の資料の書誌情報を入力する作業を開始した。図書の寄贈が9月末、予備的な確認作業の後に名和の海外出張が入ったため、研究計画書に記載の通り、本プロジェクトの実質的な作業開始は1月となった。具体的な作業としては、アルバイト2名を雇用し、暫定的に **FileMakerPro** で作成した雛形に沿って、基本的な書誌情報等を入力していく作業を進めた。ネパール語等デーヴァナーガリー文字のものについては、基本的な書誌情報について、共に **Unicode** を用いて、デーヴァナーガリー文字、ローマ字転写の双方を入力すると共に、固有名詞等については標準的な英語での表記も併記する方向で作業を進めている。資料内容が通常の図書、雑誌に加え数ページのパンフレットなど雑多な形態を含んでいるため試行錯誤を繰り返しつつの作業となっているが、本年度中に英語に関しては図書・パンフレット類の大半と雑誌の一部に関して、基本情報の一次的な入力を終えた（図書類は589件、雑誌は個々の号・巻を全て数えて449件まで）。ネパール語については図書・パンフレット類の入力が進行中であり（現在までに390項目の入力を完了）、雑誌に関してはまだ入力を開始していない。

◆具体的な成果物

なし

◆全体計画

東アジア研究室では、この60年来、世界の公私コレクションに所蔵される中国絵画の調査撮影撮影を実施し、写真資料の収集・公開に努めてきた。その結果、資料点数は無慮20万点に及ぶ。これを中核として、東京国立博物館収集東南アジア彫刻スライド資料2万点や中国敦煌莫高窟の彫刻や壁画の戦前に撮影された貴重な写真2千5百点など、新たな資料を加え、科研費（基盤A・基盤S）とタイアップして、建築分野にもわたる調査・撮影旅行を実施し、総合的なアジア美術画像アーカイヴ構築に向けて、着実に前進しつつある。

◆今年度の進捗状況

22年度は、上記基盤Sによって撮影・収集した中国絵画資料、又、中国敦煌莫高窟の彫刻や壁画の戦前に撮影された写真2570枚の整理を行い、さらに、引き続き東南アジア彫刻スライド資料及び6×7ポジフィルム画像2万点の整理を継続して推進した。まず、中国敦煌莫高窟の彫刻や壁画の戦前に撮影された写真2570枚について窟番号・撮影箇所・内容（主題等）の確認作業を行い、内容については259窟まで到了。また、東京国立博物館収集東南アジア彫刻スライド資料及び6×7ポジフィルム画像2万点については、全体件数6,000件の内、本年度は2,282件を終え、これまでの完了件数が3,164件となった。対象としたのは72機関である。

◆具体的な成果物

掲載点数約5千点の『中国絵画総合図録 三編』刊行のため、中国絵画の第3次調査で撮影したのは、デジタル画像であり、保存用・予備用・公開用の3種類のCDもしくはDVDを作成し、スタンド・アローンの状態で、東アジア美術史研究室において公開の予定である。

ただし、従来のフィルム撮影による第1次・第2次調査のフィルムのデジタル化は、デジタル化する機器が高価なため、1台で行っている状況であり、既刊の『中国絵画総合図録』『同 続編』を合わせると、作品掲載点数が1万点ほどとなり、画卷や画冊なども勘案すると、4x5インチの白黒フィルムにして1作品で約5枚、全体の概数は5万枚に及ぶので、全デジタル化による公開は、経済的・時間的な問題により、近い将来に望むことは、到底、困難である。従って、公開は近い将来刊行の『中国絵画総合図録 三編』によることになるだろう。

なお、東南アジア彫刻スライド資料のデジタル化は、本年度終了分を含め、上記、中国絵画の場合と同様に、公開の予定である。

◆全体計画

本プロジェクトはこれまで継続して行ってきた中国絵画デジタル・アーカイヴ・プロジェクトを基礎として、さらなる発展を目指すものである。アジア美術画像アーカイ

ヴ・プロジェクトの中心をなす中国絵画のアーカイブをより充実させるため、科研等で新たに収集した資料を加工・整理、公開していく。

これまでに公開した「中国絵画所在情報データベース」「東アジア絵画史研究文献目録」は国内外のアクセスがあり、世界的にも認知されてきた。本プロジェクトでは、まず新たな画像データベース「幕末期中国絵画所在情報データベース」の作成に取り組み、さらに充実した画像データベースの充実をめざす。

◆今年度の進捗状況

今年度より新たに開始した「幕末期中国絵画所在情報データベース」のための作業であるが、栃木県立近代美術館学芸員橋本慎司氏やシカゴ大学准教授チェルシー・フォックスウェル氏、コロンビア大学アロン・リオ氏らの協力を得、個人所蔵の谷文晁一門による粉本の撮影を進めながら、各地に所蔵される比較すべき原図及び谷文晁作品の調査を並行して行った。

「谷文晁派（写山楼）粉本・模本 画像データベース」データベースの仕様について中国絵画のそれに則りつつ模本・原図のデータを共に掲載することで検索の便を図ることを確認し、整理・加工を終えた200点の画像について、試験的に画像データベースの公開を試みるも、地震等の影響で作業が一部中断、2011年5月からの公開を目指す。又、中国絵画資料については、継続して写真のデジタル化を進め、新たに加わった資料整理を行った。

◆具体的な成果物

「幕末期中国絵画所在情報データベース 谷文晁派（写山楼）粉本・模本 画像データベース」

2011年5月から公開予定。

8. 東文研蔵貴重物品の整理とデジタル化（1年計画）／平勢

[造形]

◆全体計画

わが研究所には、貴重な美術考古資料が所蔵されている。これらは、機会を得てよりよい保存状況下におくことが求められている。しかし、一方において、物品の劣化が急浮上しており、それらから他の物品を守る必要も生じている。そこで、目につくところから、保存のための処置を講ずることとした。

◆今年度の進捗状況

前年度、すでにこの計画は別予算によって始まっている。その段階で、壁画5点に対し、調査の上写真上に損傷箇所を書き起こした。本年度はメチルセルロースとHPC（ヒドロキシプロピルセルロース）を絵の具層の剥落箇所に差し入れて、剥落止めした。保存箱内の中性紙により中蓋を作成した。染みが発生している綿布は、新しい綿布に取り替えた。また旧状と修理後が比較できるよう写真を撮影した。殷墟甲骨計6点と拓本11点、清朝衣服5点に対し、燻蒸を施した。黴のチェックもかねて、黴燻蒸と点検を行った。燻蒸方法は酸化エチレン製剤によるビニール被服燻蒸を行った。

◆具体的な成果物

すでに整理の折に写真を撮っているのですが、それらを順次公開していきたい。ただ、その前に、さらに調査を進める必要があると考えている。

9. 日本とアジアを繋ぐ：アジア駐在経験をもつ日本人ビジネスマンのライフストーリー（1年計画）

/園田 [社会情報]

◆全体計画

現在、団塊の世代が大量に労働市場から退出しつつある。彼らの多くは1970年代初頭に労働市場に入り、日本企業の国際化・グローバル化を、最初は端役として、最後は主役として支えてきた。またその前の世代は、すでに年金生活に入っているが、彼らこそ戦後の対日イメージが悪い中で、アジアとのビジネス関係を作り上げてきた第一世代である。

研究代表者には、1993年から2001年まで、アジア、とりわけ中国に進出した日系企業で駐在経験を持つ日本人ビジネスマンへのインタビューを行い、合計200名を超える日本人ビジネスマンの方々から、アジアでの駐在経験やご苦勞について伺った経験がある。ところが時間の関係で断片的な情報しか得られなかったが、知りうる範囲でも、調査協力者の中で数名がすでに鬼籍に入っている。早く彼らから多くの話を聞きださないと、日本とアジアを繋ぐ生きた歴史が埋もれてしまう心配がある。

駐在した先のアジアでどのような経験をしたのか。日本の本社から出されたミッションと現地の慣行・状況の挟間にあって、どのような苦勞があったのか。これをどのような形で乗り越え、現地と日本の懸け橋的役割を果たしてきたか。

本研究では、駐在経験者という「生きた歴史の証人」からライフストーリーを聞き出すことによって、一人ひとりのライフストーリーに寄り添い、日本とアジアを繋ぐ「繋ぎ方」がどのように変遷してきたかを明らかにする歴史社会学的意義をもつ。

◆今年度の進捗状況

9社を対象に、インタビューを実施した。インタビュー記録は匿名で、個人情報がないよう工夫し、ケース番号を打った。調査は、「生きた歴史の証人」がメッセージを伝えたいと思うはずの学部学生に依頼し、学生たちはアポとりからインタビューのトランスクリプト作成までを行った。そして、これらの記録をもとに論文を作成、報告書を編集したうえで、インタビュー協力者にフィードバックを行った。

◆具体的な成果物

園田茂人『日本とアジアを繋ぐ：アジア駐在経験をもつ日本人ビジネスマンのライフストーリーI（報告書）』，2011年2月、118ページ

(http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp/pdf/report_sonoda2011.pdf)

10. 社会生態史学のためのデータベース構築 (3年計画1年目) / 安富 [文献]、[造形]、[社会情報]

◆全体計画

乾燥地に生きる人々の生活を明らかにし、そこでの暮らしが生態系をより豊かにする
ようなものとなるにはどのようにすべきかを考えたための実践的意義をもつデータベ
ース作りを目指している。そこから生まれる新たなコミュニケーションが更に、データベ
ースを豊かにするような、自律的に成長するシステムがその究極的目標である。

◆今年度の進捗状況

今年度は(1)中国陝西省における黄土高原生態文化回復活動の資料集作成、(2)
中国山西省における三光作戦の村の老人の聞き取り調査、を中心に推進した。(1)は
我々が黄土高原において朱所弼氏らと協力して推進している活動に関するものである。
この研究は、コミュニケーションの渦を自ら惹起し、その渦に飲み込まれる中で、デー
タを収集しかつ発信する、という形で推進しているものである。この成果の一部を、深
尾葉子・安富歩編『黄土高原・緑を紡ぎだす人々―「緑聖」朱序弼をめぐる動きと語り(東
洋文化研究所叢刊 第24輯)』として刊行した。紙媒体を用いたのは、保存性と頒布性
を考えたものであるが、これを今後はデータベースとしてアクセスしうるものへと発展
させる予定である。

(2)は大野のり子氏が現地に数年にわたり滞在し、村の老人と心の交流を展開しつつ
聞き取り調査を行なっているものである。我々は、その活動を側面支援してきた。今回、
その成果の一部を、大野のり子編『黄土地上来た日本人―中国山西省三光政策村的記憶
―』を東洋学研究情報センター叢刊13として刊行した。この問題に関する最初の体系
的な聞き取り調査研究が、日本人の手で行われ、日本の機関から中国語で刊行されるこ
とは、大きな意義があると考えられる。こちらにもまた保存性と頒布性の観点から、紙媒体に
よって刊行したが、これを来年度以降、データベースとして提供していくための作業を
行う予定である。

◆具体的な成果物

深尾葉子・安富歩編『黄土高原・緑を紡ぎだす人々―「緑聖」朱序弼をめぐる動きと
語り(東洋文化研究所叢刊 第24輯)』(風響社)、2010年。

大野のり子編『黄土地上来た日本人―中国山西省 三光政策村的記憶―』東洋学研究
情報センター叢刊13、2011年。

◆全体計画

世界の様々なコレクションに収められているイスラーム美術作品やイスラーム地域各地に残されたイスラーム時代の建築作品の調査研究を行って収集した画像資料と作品・建築に関する情報や既に蓄積された画像資料を整理・分類・分析することによって、アジアにおいて文化的・国家的自己同一性の追求と形成がいかに関与していたかについて、イスラーム地域の事例を供するものである。

◆今年度の進捗状況

インド・イスラーム史跡写真資料の保存と整理を行うとともに、東大インド・イスラーム史跡調査団が使用した古資料を整理・複製・製本した。オランダ・レーワルデンの陶器博物館およびデンマーク・コペンハーゲンのダヴィッド・コレクション所蔵のペルシア・タイルの調査を行い、データを蓄積した。

◆具体的な成果物

インド・イスラーム史跡写真については、センターのホームページで公開中 (<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~islamarc/index.html>)。イスラーム・タイルについては、蓄積データ数が少なく、美術館および美術財団所蔵品の画像については著作権の問題があるため、公開形態も含めて検討中である。2011年3月に米国ホノルルで行われたイスラーム・タイルのシンポジウムにて申請者が関連発表を行った。

5. アジア・アフリカ学術基盤形成事業

1) アジア比較社会研究のフロンティア（3年計画の1年目）

(a) 共同研究

従来、個別に行われてきたアジアの社会学者の研究教育交流をより形のあるものとし、しかもその成果を、世界社会学会議・横浜大会で世界に向けて発信できるようにするために、以下の異なる活動を同時並行的に行った。

アジア比較社会共同研究会の実施

2014年の世界社会学会議・横浜大会を睨み、アジアにおける社会学発展の歴史を比較の視点から総括する3年計画の研究会を実施した。今年度は「アジア社会学の歴史：その特徴とユニークさはどこにあるか？」History of Asian Sociologies: What are their Characteristics and Uniqueness?」（於ソウル、2010年12月）をテーマに共同研究を進め、その成果を報告しあつた。

もともとは、日本での開催を予定していたが、各国の参加者が「アジア・バロメーターの研究会と一緒にした方が都合がよいし、何より若手研究者へのコメントを付けることが可能になる」というので、急きょ開催場所を韓国・高麗大学にした。

アジア・バロメーター共同研究会の実施

2003年から2008年まで蓄積されたアジア・バロメーターのデータベースを用い、今年度は「比較研究のフロンティア」（於ソウル）をテーマとして共同研究会を実施した。上述のアジア比較社会共同研究会の翌日（2010年12月19日）に若手研究者による報告、4セッションを設け、それぞれの研究をめぐる相互討論を通じて切磋琢磨できる機会を提供した。2003年から2008年まで蓄積されたアジア・バロメーターのデータベースを用い、今年度は「比較研究のフロンティア」（於ソウル）をテーマとして共同研究会を実施した。上述のアジア比較社会共同研究会の翌日（2010年12月19日）に若手研究者による報告、4セッションを設け、それぞれの研究をめぐる相互討論を通じて切磋琢磨できる機会を提供した。

この参加者のほとんどは、夏のセミナー（2010年7月）に参加してデータセットの基本的性格やデータベース作成の意図、その学問的意義などについて理解してもらうよう心がけたため、報告にいたるまでのプロセスはきわめてスムーズだった。また、報告会でのコメントーターのコメントも有効で、若手研究者にとっては極めて有意義な研究会となった。報告会で発表された論文のいくつかは、コーディネーターが編集する論文集に収録される予定となっており、その出版計画が本格化している。

(b) セミナー

上述のように、7月にアジア・バロメーターに関する若手研究者対象のセミナー（韓国2名、中国2名、シンガポール2名、台湾2名、日本4名）を実施し、データセットの基本的性格や

データベース作成の意図、その学問的意義などについて理解してもらった。

(c) 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

昨年来、実験的に行われてきたアジア社会学コンソーシアム（於東京）を継続・発展させ、グローバル化するアジアが抱えるアクチュアルな問題を、比較の視点からアプローチしている研究者を招聘した。その具体的なラインアップは、以下の通りである。

(1) 2010年10月26日 Fabian J. Froese 氏（高麗大学助教授）

テーマ：“Foreign Professors in Asia: Empirical Evidence from Surveys in Japan, Korea, China, and Singapore”

(2) 2010年11月8日 Han Sang-jin 氏（ソウル国立大学名誉教授）

テーマ：“Is the Chinese Middle Class Politically Conservative?”

(3) 2010年11月29日 潘允康氏（天津社会科学院社会学研究所研究員）

テーマ：“現代中国における＜公平問題＞：四都市調査（1997-2006）の知見から”

(4) 2010年12月9日 Michael Anti 氏（南方都市报コラムニスト）

テーマ：“’Structural Fallacy’ of Japanese Media’s Reports on China: My Observations in Tokyo”

(5) 2011年2月18日 Michael H.H.Hsiao 氏（中央研究院社会学研究所所長）

テーマ：“Comparing Political Trust in Hong Kong and Taiwan”

(6) 2011年2月18日 Fu-chang Wang 氏（中央研究院社会学研究所副所長）

テーマ：“Rethinking the Ethnicity Issues in Taiwan's Democratic Transition”

以上のような形で、実に盛りだくさんの活動ができたのも、各国のコーディネーター及び協力機関のキーパーソンと十分なコミュニケーションをとったからであり、特に、本プログラムが採用された直後、韓国（高麗大学 Yoon 教授）やシンガポール（国立シンガポール大学 Tan 教授）に行って、本プログラムの目的や活動内容をめぐって意見交換をしたからであり、その後中国・香港（香港大学 Lui 教授）を園田が訪問したり、台湾の研究者（上述の Hsiao 所長や Wang 副所長）を東洋文化研究所に招聘したりして、目的意識を共有してきたからに他ならない。

6. 国内・国際連携事業

1) 国内連携事業

研究成果の交換など、従来の連携事業に加えて、平成 22 年度は以下の 2 つの活動を行った。

- (a) 奈良国立博物館との共同プロジェクトの一環として、来年度奈良国立博物館の館長と学芸員を本研究所に招聘するための打ち合わせを行った。
- (b) 新しいデータアーカイブセンターを構想する金沢大学の担当者と意見交換を行い、将来のデータアーカイブの共同利用・共同公開について意見交換を行った。

2) 国際連携事業

従来から進めてきた、北京大学図書館及び台湾・中央研究院図書館との交流事業を進め、今後の共同化についての意見交換を行った。

7. 研究成果の公開・発信事業

1) ホームページの更新・運営

共同利用・共同研究拠点化を期に、センターホームページの全面的リニューアルを行った。共同利用・共同研究拠点化に関する情報を前面に掲げ、その目的と事業内容、特に公募研究事業の趣旨と公募情報が広く周知されるよう配慮した。また、アジア・アフリカ学術基盤形成事業についてもセンターの主要事業の一つとしての位置づけを明確にし、トップページのメニューから事業のホームページにリンクするようにした。ニュース記事は、共同利用共同拠点事業、既存資料に関する事業、データベース事業、その他、4 分類で利用者の種別ごとに整理し、重要記事はトップページに写真入りで紹介されるようにした。センターが提供するデータベースについては、トップページにおいて一覧できるようにし、利用者の便を図った。また、海外の利用者にむけ、英語版、中国語版についてもリニューアル作業が開始され、来年度初頭に順次公開の予定である。

2) 研究成果・データベースの公開

漢籍知識庫の構築では、昨年度に引き続き、漢籍目録 DB を【資料庫】から【知識庫】へと格上げする試みとして、「四庫全書綜目提要」を付加する入力作業を進め、22 年度中にはデータベースとして付加する予定である。

エジプト新編地誌データベースでは、2010 年 3 月から改定版を公開している。

アジア美術画像アーカイブ（第 2 期）では、収載点数約 5 千点の『中国絵画総合図録 三編刊行のため、中国絵画の第 3 次調査で撮影したのは、デジタル画像であり、保存用・予備用・公開用の 3 種類の CD もしくは DVD を作成し、スタンド・アローンの状態で、東アジア美術史研究室において公開の予定である。

中国絵画所在情報データベースおよび東アジア絵画史研究文献目録では、データの収集・整

理を行った。

東文研蔵アジア写真資料データベースでは、デジタル写真資料を DVD として保管するとともに、一部を試験的に内部で閲覧できるようにしている。

アジア・バロメーターでは、論文がワークショップで提出され、今後シリーズ（2011年刊行開始、勁草書房）に収録される予定である。

19世紀中国歴史写真集『震旦旧跡図彙』のデジタル化では、WEB上で公開するためのデジタルアーカイブの設計中である

乾燥地の生態と文化との関係を感じるためのデータベースでは、東洋学研究情報センター叢刊第9輯『Old Maps of Tuva1』2008年、第10輯『Old Maps of Tuva2』2009年に刊行された。

アラビア文字圏ポリグロット・グロサリー・プロジェクトでは、アラビア語・ペルシア語・オスマン語及びそれに関連してアルファベット表示のトルコ語につき、語彙のコンピューター入力作業を終え、その最終チェックも第一段階を終えた。

データベース「世界と日本」では、国会内外における首相や外相などの演説、サミットやASEANなどの国際会議関連文書、国際政治の基本文書や多数国間条約、日米関係や日中関係など各地域との外交関連文書などを作成し、今年度は新たに現在注目されている環境に対する重要文書をまとめた地球環境問題資料集のカテゴリーも掲載した。

3) アジア・デジタル展示館

本研究所が所蔵する貴重書、写真、考古資料等のデジタル化と公開を継続中である。

4) 出版

ニューズレター『明日の東洋学』は第24～25号を刊行し、全てのバックナンバーのPDFファイルをホームページ上で配布している。東洋学研究情報センター叢刊は第13輯『黄土地上来た日本人』を刊行した。

5) アジア研究情報 Gateway

日本国内におけるアジア研究の動向として、若手アジア研究者の研究情報を2003年度からセンターホームページ上で紹介している。今年度は「近現代中国の憲政問題と国際情勢」（執筆者：津田塾大学国際関係学科・准教授・中村元哉）を掲載した。

8. 研修事業

1) 漢籍整理長期研修

平成22年度は6月14日～9月10日に実施し、9名が受講した。6月14日～18日の1週間は人文社会系研究科文化資源学専攻の授業を兼ねており、本学の学生5名が受講した。

平成22年度漢籍整理長期研修 日程・課目・講師

日 程	時 間	課 目		講 師	備 考
6月14日(月)	9:30～ 17:00	開講式(9:30～10:00) オリエンテーション 漢籍版本目録概説 (10:00～17:00)		羽 田 正 (東洋学研究情報センター長) 大 木 康 (東洋文化研究所教授)	
6月15日(火)	9:00～ 17:00	四部分類について	講義	井 波 陵 一 (京都大学教授)	
6月16日(水)	9:00～ 17:00	漢籍整理実習(1)	実習	陳 捷 (国文学研究資料館准教授)	
6月17日(木)	9:00～ 17:00	漢籍整理実習(2)	実習	陳 捷 (国文学研究資料館准教授)	
6月18日(金)	9:00～ 17:00	朝鮮本について	講義	藤 本 幸 夫 (麗澤大学教授)	
6月21日 ～9月3日		所属図書館所蔵漢籍整理及び研究	自習		
9月6日(月)	9:00～ 17:00	慶應義塾大学 斯道文庫について (見学を含む)	講義	高 橋 智 (慶應義塾大学教授)	慶應義塾 大学斯道 文庫見学 を含む
9月7日(火)	9:00～ 17:00	和刻本について	講義	長 澤 孝 三 (元国立公文書館内閣文庫長)	
9月8日(水)	9:00～ 17:00	漢籍データベースの 利用と構築	講義	安 岡 孝 一 (京都大学准教授)	
9月9日(木)	9:00～ 17:00	漢籍補修法	講義	篠原 宏、杉本 直行 (宮内庁書陵部)	
9月10日(金)	9:00～ 16:30	漢籍整理実習(3)	実習	大 木 康 (東洋文化研究所教授)	
	16:30～ 17:00	修了式		羽 田 正 (東洋学研究情報センター長)	

平成22年度漢籍整理長期研修研修員名簿

No	所属図書館等	氏名
1	東京大学大学院人文社会系研究科 文学部図書室	ささもと みえ 笹本 美恵
2	東京大学東洋文化研究所図書室	すなが まさこ 須永 雅子
3	北海道大学附属図書館	くめ みきこ 久米 未希子
4	横浜市立大学学術情報センター	こうの えつこ 河野 江津子
6	専修大学図書館	すずき きょうこ 鈴木 京子
7	明治大学図書館	せきぐち のりえ 関口 則枝
8	駒澤大学図書館	なかじま すずえ 中島 鈴恵
9	青山学院大学図書館	なかだ さなえ 中田 眞江

9. その他

- 1) 平成22年度全国文献・情報センター人文社会科学学術情報セミナーの開催
平成23年1月28日(金)に神戸大学経済経営研究所新館会議室にて、4センターの
事業報告を行った。